

YOUNG EYES

全 日 會 報

發行

全日本学生写真連盟

住所 杉並区成田東
4-21-4全日会館内
電話315-7981
発行人 岡崎 英夫

自らの行為を定着させ

さらなる自由の地平へ

65年以來 我々の所有し得た世界に對する地圖は凄絶なる現實掟に、混沌と日常といわれる頹廢と怠惰の中に、暗黒の淵に迫いやられ死滅してしまつたのか？ いや、悶えるうめさにもにた、生存の深淵に埋め込まれた意識の下から血と肉体のうづきが、その激出すべく出口の解放を求めてさまざま足音が！ この現実の大構成と存在の慟哭に今向き合う時、我々の行為（写真）とは一体どこへ行きつこうとするのか、いやどこへ向かつて有るべきなのか、我々は今この問に答うべく行動を開始せねばならない。

69年初頭より、今に続く我々にとつて、あらゆる意味での屈辱の時代は、日々に我々を幽閉し、肉体は不自由さを痛覚するかの様に現在に至っている。この虚脱、痼癬、癒着とまさに暗黒とも言うべき無数の意識沈没の前に我々の「生と肉体」は現実的關係の中で、どの地平に立脚すれば良いのであろうか。

それにしても、今まで我々は、無意味に、何か満たされない存在を何の手立も無く、のぞきこもうとする思い（意識）の中で、その思いを思いとして累積する事としてある。

71年の人間の亀裂の中に、それを成立しえる方法を見すえなくてはならない。我々が、肉体を所有した生身としての存在を、日々に悪化する病者の人間の様相に自ずから、自閉的循環を視るのではなく68年、天を仰ぎ、対權力との対峙の中に集団的にすえた、あの欲望の全解とも言うべき、充足した空間、現実との止揚の中に在立できえた空間を、今という時代の中に生きる人間の生體の中に、新たなる、あらゆる方法を駆使し実體の中に創出せねばならないのだ」という、ジャン・リュックⅡ

がらも状況の変貌に足元をすくわれ、過去型となった物差で、現実空間に生身を感じられる我々にとつて本質的に問題にすべき、実体としての出会いを計ってきた様である。我々は歴史的かつ現在のに強いられ又強いて来た「生」のベクトルが、層層された現実空間にあらゆる屈折した様相をさらす事に対しその意味を問う事を開始せねばならない。まさに今、「そうだ、すべてを振り出すてについて語らなくてはならない、すべてはまた手をつけられず残っているのだ」という、ジャン・リュックⅡ

に何がなんでも一〇〇本という決定から、その行状の事を感じられられ、現実の事を振り出す事を一〇〇本と、自分に果しそれを一〇〇本点として出発したのである。御通路、街中、子供、お社とままたに見える物すべてつくした写真群を前にす々は彼らの激しさと、そもまして、彼らがふれあ

のフレキシブルな切こみきつてくるので有る。真はその一枚である。全身で世界を見透さうと

の中をさまよひすぎた。又時代の姿貌は、67年が確しに我々が手にした、我々の幻想の地図（我々の行為が成り立ちえた指標）を穴だらけのボロクズのごく塗りがえてしまつていった。この内的発露をくりかえす意識空間と、主題喪失の論理は、自ずから出口無しの輪を作り出し、モンモンとした悪循環をくりかえして来たのである。

今や我々が問題にすべき事とはこのあらゆる、鄙猥な自滅的意識空間をのりこえる、新たにたなる

我々は現在まで悪化する状況への焦慮の内に、個がこの猥雑なる現実の中で出合う生身として感じられる事がある意味をその本質を探る事なくなおざりに放置して来たのではないだろうか。我々が写真を撮る行為とは、個が様々なる現実の中で出合い、感じられた実体の意味を、自ずからの内に対称化し定着させ、現実（総体）との対立の中でさらにのりこえる事としての行為を作り出す事である。

というテーマに思いを馳せる時、我々は時代の姿貌を身体で感じな

生身として感じられる地平からあらゆる事が（モチーフ）をめぐつて、そのあらゆる断層という断層を掘りねき、自ずからの位置を顕在化し、定着させ、表層から深くへつき立つ我々の座標を見出さなくてはならない。あらゆる現実のあらゆる事がらの人間の烈傷に対し切こみえる、あらゆる方法が必要なのである。

その一 具体的状況

岡山商大写真部一年は、三日間

に感じるとき、このまじに感ずる時、このまじに感じたいと思わ

雑念を自分の中から、取除いた跡の様な作者の実在が、見え持つて、見る側にせ

のである。彼らの二〇〇という決意や、「すべてて高知の事は振つた。高知の事は振つた。」という言葉を感じた。という言葉を感じた。その激しさと、わかる、その激しさと、の情熱は、自ずからの位

にし、現実とふれあう方々えたのである。写真から

具体的状況

その一

岡山商大写真部一年は、三日間

の、フレキシブルな感じとはまさに、セレクトしようと思つたし、何のそれであり、自己の位置をすべて解き放つた中に、己の存在を露裸の中につきつめ、映像化の欠けまでもと高める行為を成しとげているのである。彼らはこの不透明なる現実世界に対し、自己の生存を写真（行為）の内にみすえていく事（我々にとって、たえず欠如してはならない。）を、自由なる“生”の地点より、個（人間）の存在の有様を客体として定着させ自ずからの行為の指標を打ち立てえたのである。

「軸」も持たずに自分が気になる所で、作者の事が強烈に感じられるめつたやたらと強い写真を、選んで行った。しかし、琴平で撮った写真と、琴平を撮った写真とは決定的にちがうという事が言われ、再度琴平を問題にして撮った。写真をセレクトすべく、琴平の事について話をして行った。社の境内に並ぶ300軒あまりの店のおやじの銭かんじょうのすごさ、過去には森の石松、今でもヤクザが去には森の石松、まるで宴会の続き集団で来たり、まるで宴会の続き

からその組み方の疑問点をつづき合い、止掲し合い最終的に一つのレイアウトを完成させて行った。我々はこの中において、一枚の写真の持つ意味、問題にしている事が、全体の写真が問題にしている事の中におかれた時、その意味がちがった様相を帯びてくる事がわかって行つた。あるテーマを問題にして取り組む時、写真が問題にしない個別的な事がらが別の問題にかさなり複層されその意味が深さを増し、我々のいたるべき座標を明らかにしていくのである。

その二

集團撮影行動は、68年提起されて以来全国で展開されて来た。それは、その以前の共同製作という官僚的、個人の意志を無視して行こなわれた撮影行動をのりえさらに新らたなる集団を志向し、個と個が止揚し合い、一つのテーマを全員が共有しえる事の由に、我々のやりえた写真（行為）を現実になげ出すべく出版までも含めた行動という意味で有った。しかし今や、集團撮影行動でなければ写真ではなく、集團撮影行動とはサークル全員で、ドキュメントかリアルタージェをやる事の様な、錯誤が生まれている。

ともちがう。集まってくる人間の、その宗教の有り方。信念、土着、国家権力等の質には孕まれないもつと日常の雑事諸々の生活意識を密着した所を引きずって集まってくる所だ。それは言うなれば、「俗っぽい」という時の、「俗」っぽさを生活の延長を引きずって集まる所だ、俗のメッカの様な所なのだ。又我々の日常の中にもいつも感じられる事なのだ。

我々は、具体的に撮影した人の話の中で、零平について我々が問題にすべき地平を明らかにして行き、再度、零平を問題にしている写真のセレクトへと向かったという。長崎で撮られた写真1を前にして言われた事、「退くべきも死、

その三

その三

場が止揚し合う集団の中で止揚され
ていた。提起した、固定された一つのパ
ターンなのである。それは決してサ
イクルをまどめるべき急になるの
ではないし、個人がやるうとする
事を迷規定して行く事では決して
無い。たぐはドキメンタリー
的なテーマにおいても、ロケハン
の資金の検討、撮影、現地で個が感
じた事の検討、そして写真がやり
えた事の総体の把握、問題の再度
の立て直し、撮影……と集団的止
揚をかさね、写真だけではなく
ての撮影地の意味がわかる地図
が、質量集など出版までの「個と個
が止揚の中で、詳細に思考をめぐ
らし全員が、それを共有しえる」
あらゆる型をとって遂行されるも
のである。

9月15日の中、四国宮宿にも
おいて、琴平（金刀比羅大権宮と
併言われている）に集団的に取り組
んだ作品に出合った。4回にわた
り撮影された500枚の写真群を

（全国に展開される集団撮影行動
も同じであるが）琴平を問題にす
る事であり、琴平で撮る事とはち
がうのである。又「琴平とは一体
自からにとって何であるのか」と
いう個々人の問いの中に、止揚さ
れる。

我々は続いて行なわれた、九州
リダース合宿において、長崎と
八代（熊本県）集団撮影行動の
写真群と向い合った。まず場所別
事がが別々に写真を分け、各事がら
を模造紙一枚程度に全部セレクト
を終え、各写真に番号を付け、（
街1、街2といった具合）である
（個人が自分のノートに一人で、
20〜30枚前後の写真をレイアウト
して行つたのである。その後、3〜
4名がグループに成りそれを検
討し一つのレイアウトを作り出し
又そのグループをドッキングし、
一つを作り上げ、こんどは全体で
検討して行つた。全体が、写真群
のやりえた事をどこへ向けて組ま
れているか、又個別的写真の意味

実原則の中におかれた人間の「生
」が内的に持たざるをえなかつた
「暗黒」「無明」の世界。少女の
せまて来る様な感じとは、過去
において、親鸞が「愚痴」と言い、
源実朝が和歌に吟じ又西国八十八
箇所を彷徨する御遍路といわれる
人間の内に、街をほつき歩く、千
ノピラの心にびたりと張付くか
の様に有る、現実に対するある
知の有り方、この世界とはそのや
さしさにおいて、永久に自己を位
越できえる、あまりにも日本的な
幻想空間なのだ。

作者は自すからの（人間の）中
に棲息するそのすまじい世界に
降り立つて行つたのである。彼は
次の振るべき場を西国八十八力所
へと向けた。自すからの位層の中
に对称化し、みずえた、この世界
を彼は、俺が御遍路に成ればいい
んだな」と言い切り、再度その意
味を現実の中に顕在化させ、自す
からの位越する位層をのりこえる

A black and white photograph of a dense urban street scene in Japan, likely Tokyo. The street is filled with cars and lined with tall buildings. A large Coca-Cola billboard is visible on the right side of the image. The buildings are closely packed, and the street is narrow. The image captures a busy city environment from a high-angle perspective.

写真集

(11月中旬出版)

《ヒロシマ・広島・hírousíma》

被爆一人間に対する裏切りと犯罪の25年
71年〈広島〉／今又、さらなる悪魔的
野望にみまわれる広島・日本
対置すべき人間の側からの視座と行為を
ここに…

造本／写真集 B 4 変形 236×170mm(たて×よこ)
144頁 資料(別冊) 48頁

定価 ￥2,800 予約価 ￥2,300

予約、購入をされる方は下記へ予約票
と代金（送料別）を添えてお申込み下

製作／全日本学生写真連盟

「広島デー」実行委員会

東京都杉並区成田東4-21-4 (03) 315-7981

出版／株式会社 491

東京都杉並区桃井 1-36-6 (03) 395-0491



地区通信

66年以来、我々と関係のなかつた九州において、昨年の公害キャンペーンを境として、サークル及び写真と我々と同質の問題をかかえた人間が立ち上つた。七月雲仙の百六十名の含宿、そして九月リーダース合宿をへて、その活動を益々展開している。

た。そして、我々は写真を総体として見、レイアウトをやる中で二校の写真が群の中に置かれた時、その一枚は、静止した写真として

今私達は「郡上」に至る創造の一端を、サークルの場につき返す空間の創出にせまわれている。そこ初私達は、郡上踊りと青山藩（郡

を規定していくこと―自分の生き方―へと転化できる質をつかみとっていた。

何も存在しない。(67福岡合宿へのアピール)」

「今の支部、又はクラブに言いたい事は、あまりにもみんながやる気のないことだ。それは、支部、又はクラブに対してではなく、写真そのものについて興味をもっていないからではないだろうか。」

二、三年前までは非常に活発だったらしいが、それは一人一人が写真に対して、ほんとうに興味を持っていたからではないだろうか。一人一人が興味をもってくると、もっと活動は活発になり、支部もクラブも良くなって行くだろう。今は丁度、どの学校において九学連を構成する我々自身の

年中心事とした撮影会・コンテスト・合宿があり、日常のサークル活動すら制度化しつつあった。支部役員、本部役員、サークルの幹事までがその制度を事務的に遂行する機関となっていた。

サークル批判、連盟批判は急がれていたが、写真に対する方法、サークルに対する方法を、我々はその制度から抜けきれずに、依然として持ちつづけていた。そこを突破する方法を見出す術を知らなかった。そして、連盟に不満を持つサークルや個人は、連盟又はサークルから抜けるを得なくなっていた。

我々はこれを単なる論理ではなく我々の体で変革していた。自らの血から湧き上った言葉を発する。こと、全く新たなもの(写真例会)、未知なるものに対して体を前面に押し出そうとするエネルギーによって。

七月二十二日からの雲仙合宿は、参加者七十名の写真四千枚を比較することから始められた。やり得たところの違いを見ることが、総体の中での位置を把握すること。それの中で写真に対する、人間に対する我々の関係の持ち方が問われた。

としていた時、自己課題をそれ自体は、極めて静止された個人的なものへと変質し、「小さくなっていく」自分に気付くのみであった。今、我々は我々をサークルに、現実には、解放する掲げを持ち得る。以後各サークルは、学祭に向けて撮影を起してそれを集約した形の写真を作成する。また各サークル地区の集約を明確化し、運動を遂げる本部機構の形成に向け、十月上旬総会を開き新連盟の体系を形造る。

名古屋女子大学写真部の場合、撮る具体性の中で、郡上の町の白地図に全員で、感じたことを余すことなく埋めつくした作業によって、郡上の町の全体へと志向する起因を作った。それは個人的「そういう風にとらえることはあなたの問題」としてしか対象を問題にできなかったことと全く違質のものであった。具体から具体へと思考する方法として、そして平面的な地図をどの様に私達の側から立体化するか——そのことは郡上踊りに移行する人間のエネルギーの姿質としてあり、又一人一人が郡上に定着する糸口をみい出したの

のかを歴史のひだにからみあう今の人間の問題としてつき出すことができなかった。その本質へ私達が身をおろすために、サークルをやる中で様々に出会い、考えることを、サークル全員のこととして対象化することであった。さらに郡上の具体的な日常の問題として「私にとって郡上とは何か」といった問いの中で行われていかねばならなかった。あの時私達が心に深く切りきざんだことは、一人の人間に背おわされた現実、単に個人的なものとしてあるのではなく、一つの凝縮され表出した問題としてあること——現実と対峙することは、草の根がはうごとく

71年今、郡上にみる日常はすでに私達のとりまくことの中にあり、そこに組みこまれていく時代のひだはさらに深く複雑になり、可迷的に時は淡々と流れていく。その情況に対して私達の具體的な行為として、くいをうっていくことによつてしか、郡上をやり得たことの想いをはりめぐらすことはできないであらう。「郡上」をある一サークルの段階で帰結することなく、創出への展開をどうサークルの場で止揚するか、そこには自らの状態からの脱却起点に、雑草のごとく、無数の郡上の日常にくいはをはりめぐらすことなのではないか。

べく行為を開始したのである。彼はデクテクと八十八カ所を歩いてまわり、御遍路がやる事そのままを繰り返す事から、その事を初めて行つた。我々は、我々の心をとらえる、あらゆる事がらの考察を開始せねばならない。彼はその地点に立ち自ずから内に棲息する存在の有り方の中から、現実にとり降り、さらにその事を逆手にとり現実との関係の中に、自ずからの「生」を拡大させるべく行為を開始していったのである。

68年以前、我々のテーマは、あらゆる個の位層の中から、心をよめる事を現実的空間に向かつてその意味を問いつつ、**「街・祭・女」**「テレビ」**「女」**「ちびっ子キャンパング」**「家」**「フアツション」**「子供」**の頃遊んだ玩具、「やさしさと敬意」「自画像」……と無数に、その生存の奥いをかきわけ、**「具体的対称の中に己れの「生」の**意味を見い出して来た。我々は今のあらゆる虚妄なる思考を前にして、

「生」が生ま生ましく自由を追求し合い、互いの相剋の内に今目的必然としての人間の生存を、今ここにのりこえるべく、その烈傷を増長させねばならない。

60年代は終り70年代へと突き進む時代の人間に、何が崩れ、何がおころうとしているのか。我々はこの不自由なる過渡期の内に、不自由がゆえにその自由を欲望する存在の声を聞きとれる。そしてそのベクトルが、一体どこに向かつて、

のテーマが、その意味を拡大し、我々を支配する掟から、解き放つ位置へと止揚する事を開始する。この時点より、全国に展開されつつある活動から生み出された写真すべてに對し、我々が必要とするものを選択すべき「全日全国例会合宿」を提起する。我々が創りえる総力を結集し、さらなる発展へと向いえる写真的空間を、全国サクルの中に創出せよ、

全日全国例会合宿に結集せよ、

四国地区

全四国的規模の中で…………

四国学生写真連盟各サークルは各自下宿にこもり、押黙り、肉体が自身から遊離し、長いアーケードの白々しい光の中に、何もわからず何も見えない、倦怠と、自分に対する憎悪とあきらめと続く長い悪夢が過ぎていった。

そして、六月、香大に「ここ高松という何事も起こりえない、白っぽい空は街の中で何事もなし

我々自身の行為を打立てて行く原点を持とうとする。」(香川大)と香大サークルは、我々に関するすべてに、問いかけて来たのであった。

アビールを書き、四国から全国へと行為を提示してから、四国はかすかな動揺を始めた。そして、9月1〜5日の中四国台宿以後、各サークルで、写真を手ばなし、

全四国的規模の中で……

四国学生写真連盟各サークルは各自下宿にこもり、押黙り、肉体が自身から遊離し、長いアーケードの白々しい光の中に、何もわからず何も見えない、倦怠と、自分に対する憎悪とあきらめと続く長い悪夢が過ぎていった。

そして、六月、香大に「ここ高松という何事も起こりえない、白っぽい空虚な街の中で何事もなしえず、ただ時間の流れの中で、いたずらに空虚な想いと生活に沈んでいる。香川は香川としていかなる文化構造を持つのか。我々がこの香川の文化と無縁に存在しよう」と試みても、それは偽りの虚構の行としてしか在りえない。

我々は、香川のもつ諸々のものを発見していくことによって、我々自身の日常の在り方、及び、我々自身の行為を打立てて行く原点を持とうとする。」(香川大)と、香大サークルは、我々に関するすべてに、問いかけて来たのであった。

アビールを書き、四国から全国へと行為を提示してから、四国はかすかな動揺を始めた。そして、9月1〜5日の中四国合宿以後、各サークルで、写真を手はなし、撮ろうとしない人間、どうしたらいいのか悟らない人間の、自分の暗い閉塞した回路の中でしかなかった動揺も、零平の地層のごとく堆積した、人間の生きざい負への生の痛苦を見ることができた。

俗のメッカと言われる零平、阿波踊りの時にしか、生を確かめ得ぬ徳島の街、現実生活、思想、自分自身さえも他者を共有しえず、自

ためには、生きることへと、自身を解き放していかなくてはならない。自分の中で、自分のことを掴みきるために、こう撮らねばならないという、自らの形骸化した論理を排し、心をよぎる全てのものに對して、生々しく感じられる所から、自己を全開し、自由な所で今の中に自分の存在を成り立たせるべく行為を開始した。

まず、全てのことを包括でき得る本部を成立し、四國通信発行及び、暫時本部会を持ち、各サークルの写真状況の中から、一冊の本を製作する事を企画している。

今、四國の一個の小さな人間の中に、大きな事が始まろうとしている。

—サークル活動の中で

雑草のごとく――

今私達は「郡」に至る創造の一端を、サークルの場につき返す空間の創出にせまられている。それは再度「自分にとってサークルとは何か」といった問いを、そして何の姿勢もなう流れていく郡上の町の、私達の日常の閉止めとして振る行為を定めていかねばならない。

名古屋女子大学写真部の場合、撮る具体性の中で、郡上の町の白地図に全員で、感じたことを余すことなく埋めつくした作業によって、郡上の町の全体へと志向する起因を作った。それは個人的「そういう風にとらえることはあなたの問題」としてしか対象を問題にできなかったことと全く違質のものであった。具体から具体へと思考する方法として、そして平面的な地図をどの様に私達の側から立体化するか——そのことは郡上踊りに移行する人間のエネルギーの変質としてあり、又一人一人が郡上に定着する糸口をみい出したのである。その時初めて郡上の歴史を知る必要性へと移行した。が最終私達は、郡上踊りと青山瀧（郡上一揆）の関係、単に青山領主をい殿様をしてしかとらえられなかったこと、そしてなぜ郡上踊りの様相が、私達にとって奇妙なさまざまなエネルギーを感じさせるのかを歴史のひだにからみあうのができなかった。その本質へ私達が身をおろすために、サークルをやる中で様々な出会い、考えることを、サークル全員のこととして対象化することであった。さらに郡上の具体的な日常の問題として「私にとって郡上とは何か」といった問いの中で行われていかねばならなかった。あの時私達が心に深く切りきざさんだことは、一人一人、創出への展開をどうサークルの段階で帰結することなく、創出への展開をどうサークルの場で行うのか、そこには自らの状態からの脱却起点に、雑草の根がはうごとく

方へへと転化できる質をつかみとっていた。

69年キャンペーン時に「無数の郡上を想起せよ」とあった私達の命題は、今、居ながらにして、深く郡上の人々の生き様と相対する私達の生き方へと昇華する起点であることを想わざるを得ない。

71年今、郡上にみる日常はすでに私達のとりまくことの中にあり、そこに組み込まれていく時代のひだはさらに深く複雑になり、迷走時には淡々と流れていく。その状況に対して私達の具体的な行為として、くいをうっていくことによつてしか、郡上をやり得たことの想いをほりめぐらすことはできないであろう。「郡上」をある一サークルの段階で帰結することなく、創出への展開をどうサークルの場で行うのか、そこには自らの状態からの脱却起点に、雑草の根がはうごとく

いをはりめぐらすことのないものでもない。

あらゆるモチーフに

向かつて

關西地区

オール関西フエスティバルに

向けて

東北地区

自らの位層を

決定せよ!!

昨年の十一月に東北のあるサークルが仙台で路上展示を試みた。それは一般的な学内展示・学外展示でもない。即ち、目抜き通りの工事現場の壁に約百枚の写真をもたべ張り巡らし、雪の舞い散る中を、背を丸くして行きかう人間に対して真正面から向き会おうとした行為であった。正にそれは、東北、の中で根深くある自己内部の満足の写真利用集団からの脱皮であった。こういう中より連盟設は、定委員会が出来上がり、以後の活動策・公響集会・サークル発掘と

動を続けて来たのである。十二月、仙台・山形・福島各地区より合計八サークル五十人を集め連盟設定合宿が持たれた。その中で連盟の在り方、活動内容など参加した一人一人がイメージを作って行く事より、連盟活動がスタートした。そしてこの合宿の中で、全東北サークルの問題の上に連盟は位置するのだと確認しその具体的な行為が見い出された。それは各地区では合同例会、新入生会、そして、具体的なやる事が見えない時、人間の関係の持ち方、

ない事に神経をとがらし、無我夢中に体を動かして来た。夏休みに迎える頃、今まで体を動かす事の中で、連盟を構築して来たそれ自身が何か不安定でみんなの中にしっくり落ち着かないものとなる。それは、人を集める事をやっても、実際にその中でどういう事を問題にし、何を打ち出していくのかが明確化されないままするする動く事に緊張し続けて来た。そして、具体的にやる事が見えては、でもやれない、と地獄の底からのなげきを吐く状態の中に身を沈み込ませている。この様なはつきりしない今の自分の位置より引き出し得る方法を、早速に一人一人が持たなくてはならない。この必要性の元に、十月九・十・十一日の東北合宿が設定される。この合宿の中では写真と自分との関係・かかわり方をはつきり個人の中に定着し得る様に全力を向ける。

サークルからの報告

「足尾」第六次撮影合宿より

J女子大学写真研究会

沈む陽に向かつて出発した我々を迎えたのは、足尾のひえびえと湧えかえった空と、刺す寒気に響く渡良瀬の川音だった。

我々は、「古河」の二字と、屋根の低い家並と、立ち入り禁止の立て札がいやに目につく町のじわっと絡みつくような人情の中にサークルを持ちこんだ。

「本山」、名の示す通りの位置、上に、明治の匂いと歴史を孕んで生息する工場群。下に枯く絡みつくような感で居る青年たちや、肺病院において、「帰る家がない、花だけは正直だ。」と語る老患者、自らを「井の中の蛙」と言い、「資本家にはかなわない」と、こともなげに言ってしまう中年の患者。少女は、「いすれ、足尾の地を出ていく。」と当然のこゝろのように語り、子供もやっぱり遠まわしに絡みついてくるような居方をしている。我々はそのような日中の様々な経験や「思い」を夜足尾写真集セレクトの過程で、反省し消化していった。

ところで、全体一つの「事」を志向する人間の集まるころ、それが大学のサークルなら、なおさら「たて」「よこ」の意識を無視することはできない。その「たて」の意識が後輩にはともすると先輩の写真における彼らより先行する過程が見落され、その結果のみが大きくどうしようもないものとなつてのしかかつてくる。そして、自分一人でその重みを負つていく中でも、抗道にもぐつてい

に年会形式のミーティングがもたれた。

そして、「よこ」の連帯の中で先輩の互いの真剣な相槌の表出。先輩も又、試行錯誤の中に身を置くことの認識が、確固として、重い「たて」の意識からの転換をはかる。

よく、人と人との関係の中で、「げんかをしる」と表現することがある。この場合の「げんか」とは、「お互いの実存のぶつかりあい」との意味あいであろう。それが常に可能な場所が、サークルではないだろうか。

我々にとつて、足尾の地も又、サークルの拡大された場である。たとえば、町から若者が流出しは踊る血の色。

力を借りて、深安合宿所にまで戸口においては、腕すくでもといった姿勢で我々に、それらのものを投げかけてくる。その場では確かに、足尾に住む若者と、彼らに結いさずりの人間として挑まれ、でも足尾を自分とのつながりの中で、押さえようとしている我々として真剣なぶつかりあひがあった。

我々はそこで、他の何ものでもないJ大サークル、そのものを創り出す。「足尾を撮る」とこと「足尾で撮る」ことを忘れてはならない。我々はそれを、一つの形にきたら写真集に……。

足尾に向けて送った時、行く手を架めた夕陽、朱の空は、今思えば踊る血の色。

△会館維持に支援を▽

各地区、サークルの結接点であり、新たな運動の起点となる会館の維持は、今まで金銭的に大きな圧迫を常にかかえていたが、今月に入り借金の残りは一部を残しているのみとなった。しかし、今後一カ月間、会館を維持するのに二十万円位を必要とするので、各地区名々の運動と共に全国の会員の絶大なる支援を――。

人間の居万の問題にベクトルの方向を問題にして行く必要上キヤン隊行動等が提起された。

今までも東北の中の活動を見て、この東北と努力を積んでも片や東北の裏側、ほとんど固人を手が長く流く中心、元氣な人間を

人間の居万の問題にベクトルの方向を問題にして行く必要上キヤン隊行動等が提起された。

今までも東北の中の活動を見て、この東北と努力を積んでも片や東北の裏側、ほとんど固人を手が長く流く中心、元氣な人間を

させて行くという現象は後を絶
 なくなつた。この事は絶対に、二
 こそ再現してはいけない事として
 在し、常時連盟の動きを絶やさ
 ずつてはならぬ。この事、無我夢
 中にして来た。

地獄の底からのなげき声を吐く様
 子で、

身体を迎える頃、今まで体を
 がさず事の中で、連盟を構築して
 をそれ自身が何か不安定でみん
 中にしっくり落ち着かないも
 なる。それは、人を集める事
 っても、実際にその中でどう
 態の中に身を沈み込ませている
 この様なはつきりしない今の自分
 の位層より引き出し得る方法を、
 早急に一人一人が持たなくてはい
 けない。この必要性の元に、十月
 九・十・十一日の東北合宿が設定

事を問題にし、何をどう出し、される。この台座の中では写真とくのか明確化されないまま自分との関係・かわり方をはつずる動く事に緊張し続けて来きり個人の中に定着し得る様に全そして、具体的にやる事が見力を向ける。

「なる。なくとも」大においては、その真を詰めていくうちその問題一年の個々人の内であろうしよなく発露するところ、必然的

く若者が、「東京の女の人と話をしたい」と接触を求めてくる。その同一人が、町で力メラを構える我々に、「実際に抗議にもぐってでも本当の足尾を見るべきだ。」と我々に挑んでくる。それも酒の

して、「よこ」の連帯の中で
の互いの真剣な相廻の表出。
も又、試行錯誤の中に身を置
との認識が、確固として、重
かに、足尾に住む若者と、彼らに
結局いきなり人間として挑まれ
る。三篇を自らの一つのまと

く、人と人との関係の中で、
んかをしう」と表現すること
の。この場合の「げんか」と
お互いの実存のぶつかりあ
ひの、手紙のあいひのこと。とし
たてての意識が、この車程を
の中で、捕らえようとしている我
々とて真剣なぶつかりあひがあつ
た。我々はそこで、他の何ものでも
ないJ大サークル、そのものを
創り出す。「足尾を擲る」ことと

「足尾で撮る」ことを忘れてはならない。我々はそれを、一つの形にできたら写真集に……………」

足尾に向けて発った時、行く手を架めた夕陽、朱の空は、今思えば踊る血の色。

●収録作品3,000点、エルンスト・ハース
ジョン・ドミニス／ユージン・スミス／篠
山紀信／カルチュ＝ブレッソン／エドワ
ード・スタイケンその他全世界の有力カメラ
マンを網羅――。

無料試読のおすすめ
1週間、じっくり内容をお確かめのうえお
買い求めいただく……タイムライフブックス
ならではの制度です。ぜひご利用ください。

お申込みは——

本紙に折込んであるパンフレットのハガキの部分に必要事項をご記入になり、ポストへ投函されるだけで完了です。

無料プレゼント!

いまお申込みの方に、ポケット
フォト・ガイドを無料贈呈—。
プロ、アマを問わず、カメラマ
ン必携のハンドブックを、お申
込みの方に差し上げます。

TIME LIFE BOOKS **744/747 7"7ス**
東京都千代田区大手町タイムライフビル
業務部/東京都文京区小石川5-6-9
ドミ小石川ビル 2階 千112
TEL. 東京 (03) 947-4151

過去30年、ライフはつねに世界の写真界の中心に位置する広大な殿堂といわれてきました。そこに集められた写真作品は、あらゆる意味で現代を代表する作品でした。世界有数のカメラマンたちがライフを中心にして偉大な仕事を成し遂げてきたのです。さらに、ライフは、カメラマンのみならず、写真技術の練達者たちすべての殿堂でもありました。

ライフ写真講座は、それらライフのカメラマンたち、また写真技術者たちが、これまでの経験と知識のすべてを注ぎ込んではいじめて誕生したのです。

ライフ写真講座の内容

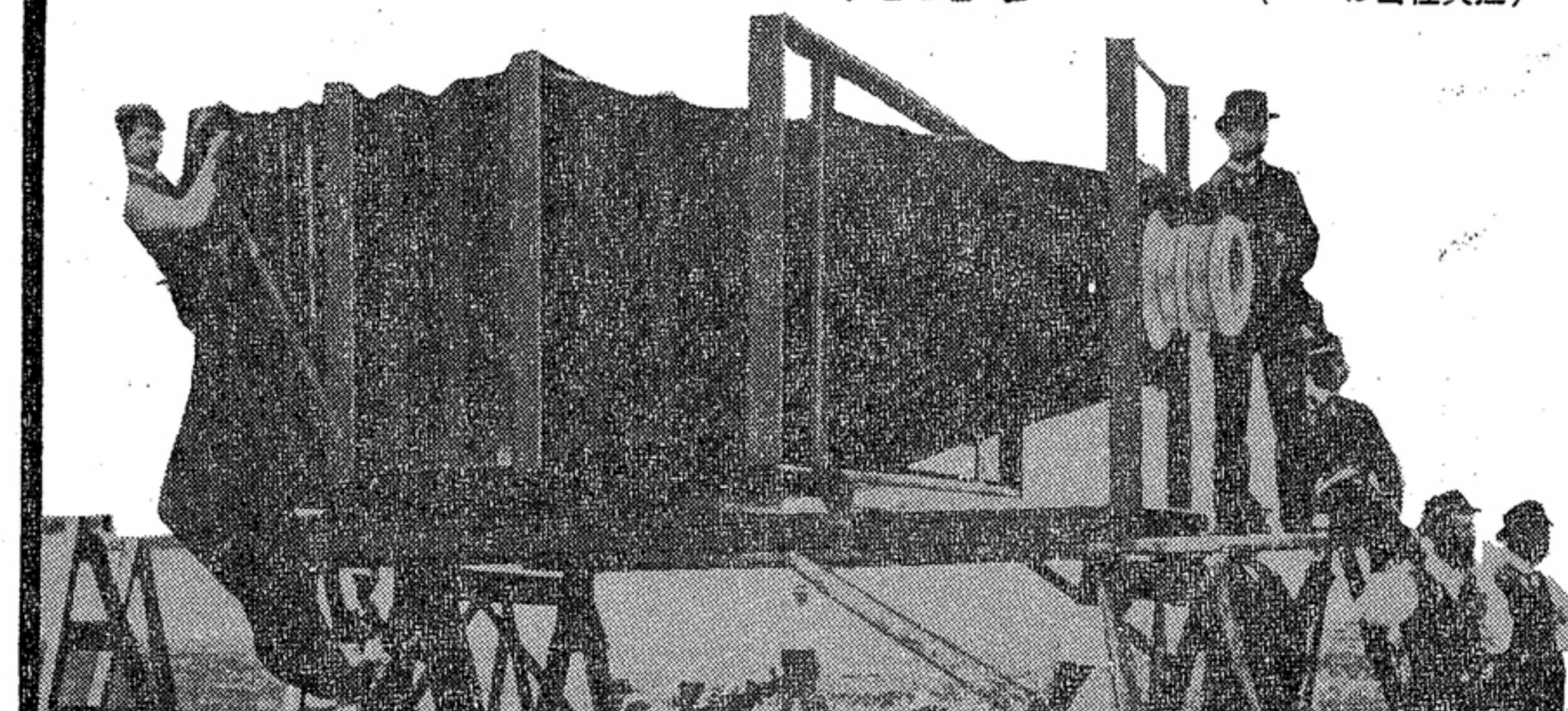
第1巻／カメラ	(既刊)
第2巻／ライトとフィルム	(〃)
第3巻／プリント	(〃)
第4巻／カラー	(〃)
第5巻／特殊撮影	(〃)
第6巻／写真の主題	(〃)
第7巻／フォトジャーナリズム	(〃)
第8巻／写真技術の展開	(11月刊行)

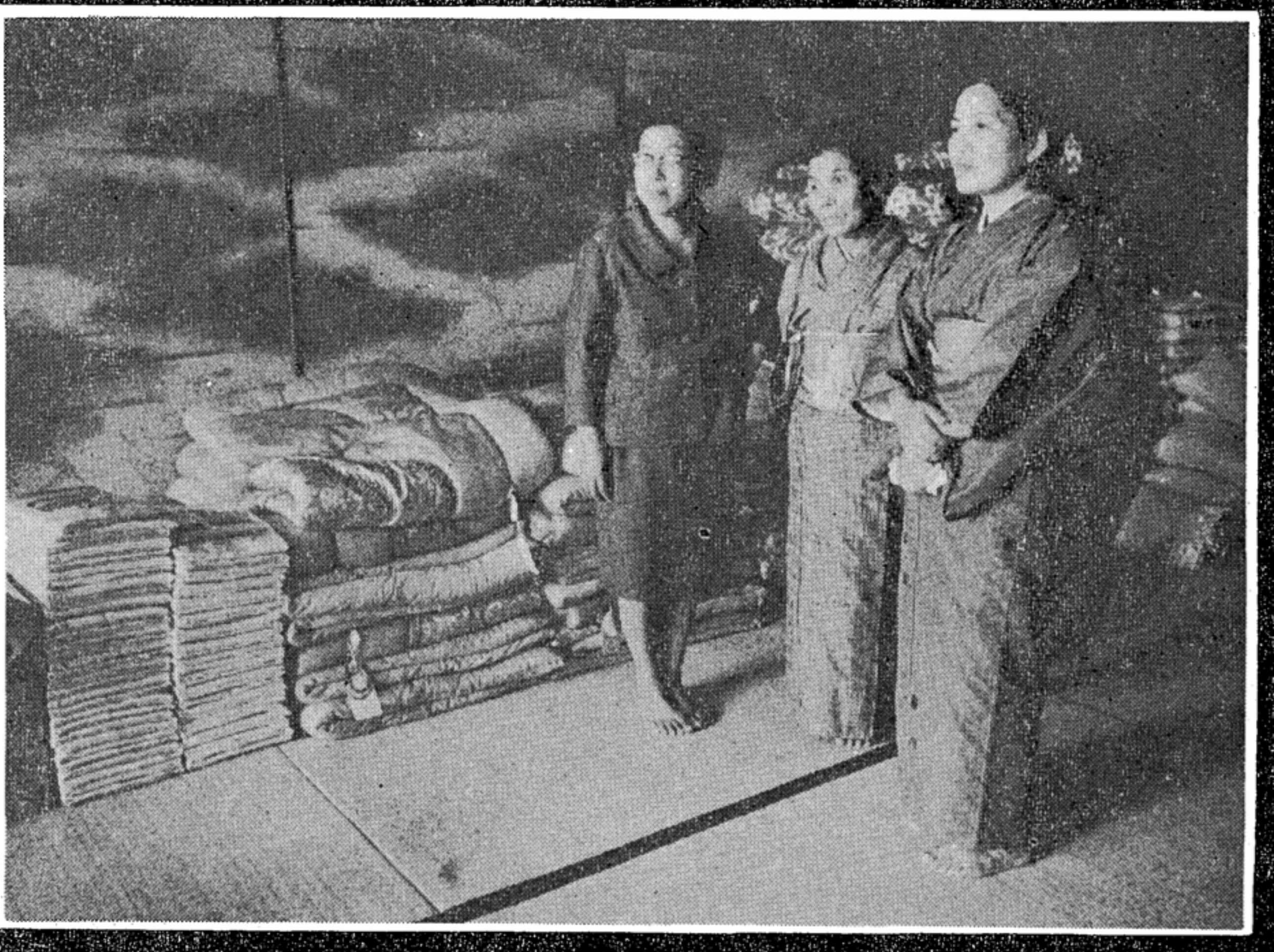
以下続刊

以下続刊

世界の写真界をリードしてきたライフが
総力を結集して編んだ待望の写真百科全書!

ライオン写真講座 各巻 定価 2,480円 (郵送、包装料は当社負担)





広島キャンペーン

果して日本国、日本人が唯一の被爆国であり、被爆国民であらうか。今なお原爆症に病む海を越えた朝鮮半島の人々を我々は、どう受けとめねばならぬのか。昨年十一月渡航した孫振斗氏に対して日本国政府が取った態度はどうであったろうか。密航者の汚名をかぶせ、孫振斗氏を強制送還の処置にしたのである。大東亜戦争時、四百万人の朝鮮人民衆を権力を持って駆り立て、強制連行し様々な苦行につかせた事をよもや忘れはしまい、その内、広島周辺四万、崎三万人の人々が被爆している。そして三万を超える死者を出している。その事に対して我々は何をやるうとしたか、何をやったか。ここ数年被爆国日本は広島の火を、長崎の火を消してはならぬと提言して来た。発想の根源は被爆体験が風化しつつ有り、その時広島

長崎の被爆にしがみついているだけでは世界的レベルで運動を起こし得ないと云う。世界を危機に陥れ入れるであろう核について、国際的政治情勢について検討しなければならぬと云う。被爆体験（被爆者や、日本国被爆といった限定ではない）の風化だともよくもぬけぬけと云えたものだ。被爆体験に内包する実質と、真の意味を問うたことがあるのか。気の抜けたピールの様な言の葉を弄する國際主義の野郎共に耳を貸すわけにはいかない。歴史が受け持った体質と義の本質的な意味に疎とい人間共此の日本を、此の世界をまかせるわけにはいかない。閑話休題。一方、主体背負う我々の側に一体何が起ころうとしているか。60年代中期以降の闘争の時代に目を輝やかした我々の身に何が起ころうとしているのか。意味の無い鋭さだけが増し、触角が発達した不気味な人間に我々は出会う。根無し草の様に浮遊する存在態度を保持し、奇妙な明るさに取りまかれていてる人間達に我々は出会う。背立ちと混乱の只中に我々は立っている。人為の成した圧力と物質と自然と人爲にからまった脅威に生存の不安を覚え、自己保存の本能に身をかり立てられ、己れに厚い皮膚をあらわして身をかたくなにさせている人間、欲望だけがによりきり顔を出している人間。我々は今肉体さえも己れが自由にさせることが出来なくなっている。いや白蟻に虫はまれた肉体の柱が突然顔を出したと云ってもいいかも知れない。精神の苦痛が自らの肉体をも破壊させ様としているのだ。今ここで、肉体論の花を咲かせ様と思うのではない。暗黒の深渊に身を立たせている我々、不自由さ一人の虚妄性を、又は被害と妄想との關係を明らかにせねばならない。まずもって、自己聖化への道をとさそうではないか。そして、現実態化している敵と対峙しなければならぬ。決意等と云った精神主義的な志向を排斥させて、真に敵と対立するべく我々の思想と運動を強固にうち立てよう。此に一冊の写真集「ヒロシマ、広島 Hiroshima」を提出しよう。此の写真集に参加した人間達は、68年頃以来四年に渡る十数度になる撮影行動を敢行した。内部対象へ広島Vをせり上げていった。写真集に構成された一業一業の写真は、撮影者の自己内部と対象へ広島Vに両刃のやいばをつきつけている。自らに歯がみしくなる心痛をも対象化させていった彼らの苦吟の聲を受けとらう。その



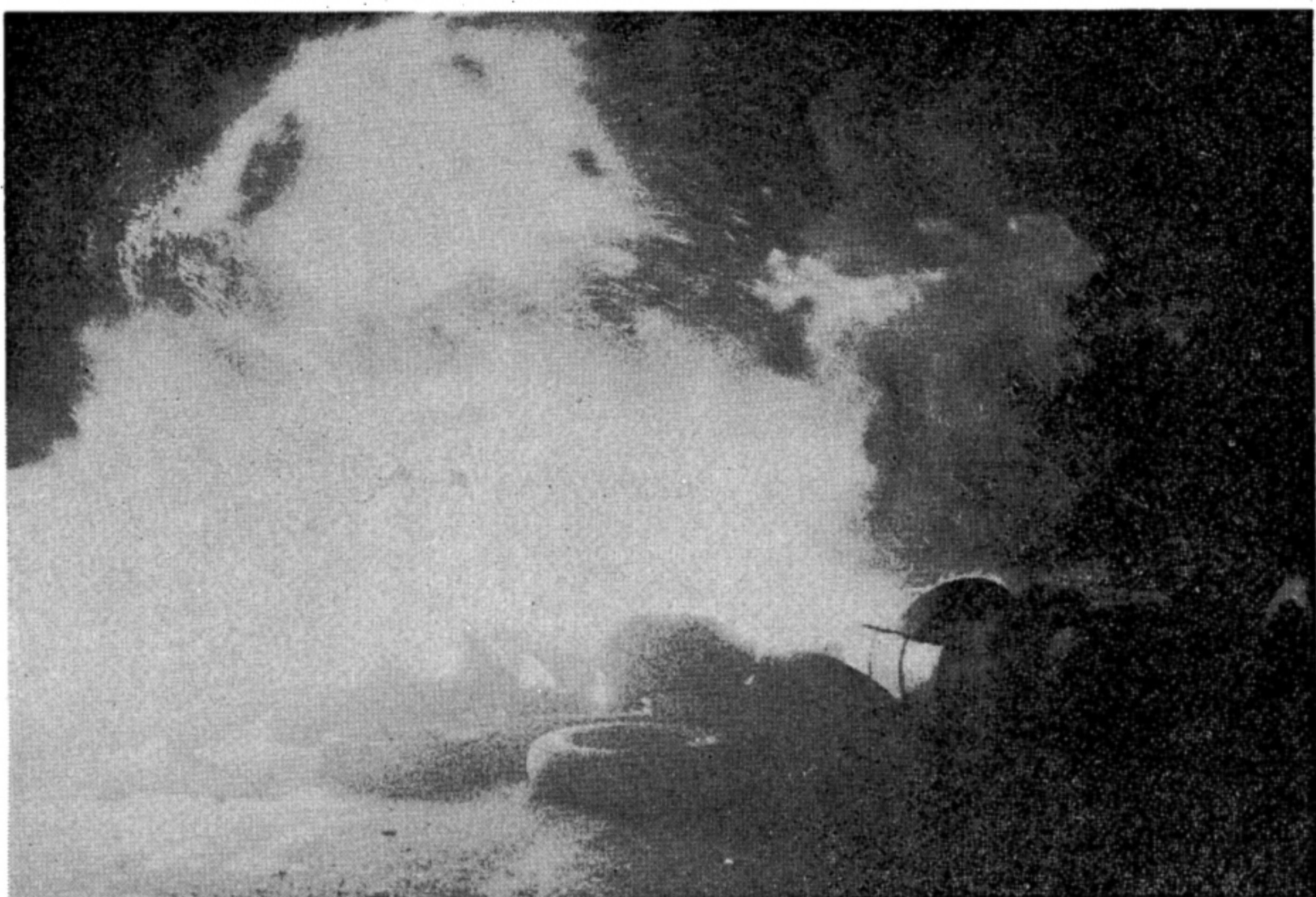
広島現地報告

A black and white photograph showing a large crowd of people gathered in a vast, open area, possibly a stadium or a large square. In the background, there is a large, dark, irregular structure that appears to be a large building or a monument, possibly damaged or under construction. The foreground is filled with many people, and the overall scene suggests a significant public gathering or event.

れた人間の怒りによって乱れていった。式典は、混乱の内に終り、参列者の「帰れ、帰れの怒号に、佐藤首相は、身をうちめ、乍ら、公園内を去っていった。その後、被爆者青年同盟の主権による熱っぽい集会が去りやらぬ人々を巻き込んでつづいていた。死者と生残者を闇の中に抱き込む中で、虚構の平和幻想をまきちらした平和式典は、人間の達の怒りの声によってどす黒い腹わたを出して横たわった。そして私達は、また課題を投げかけられた。平和式典が終ると同時にふりかかってくる現実の日常性に在る虚妄性、支配構造に張りめぐらされたその実態と、それを支えるもの幻想を、いかに叫弾し、打ち倒すのか、の課題を。被爆者青年同盟の人間が云う「原爆投下を許した我々の両親達より我々の方がまだ進んでいえる。まだまだ等と、どうして言えようか。」

取
扱
い

K K 4 9 1
東京都杉並区桃井1—36—6
電話(03) 3 9 5—0 4 9 1
振替東京71546



「札幌」北海道一〇一才五期撮影

た傷として 国家の特殊支離の具 間取巻の歴史の巨臂の人間のあと
えない力によって、我々の血肉を模すべてに對して、自分の身を引

☆

☆

דבר

ひかり◎あざやか
さくらカラー